

## 【講演記録/愛知大学史シリーズ講演会】

## 昭和30年代から平成にむけての愛知大学を語る —愛大の変遷を振り返る～昭和30年代から平成の時代～—

愛知大学元理事・事務局長 田岡 鈞郎

(2019年11月17日、愛知大学本館)

田岡でございます。こちらから見てみますと、知っている方も何人かいらっしやって、どうもやりにくいなど。というのは、愛知大学在職中には随分いろいろなことを言わせていただいてやってきたということもありまして、今日はできるだけ静かにしゃべりたいと考えています。

愛知大学を去ってから20年近くになりますので、記憶の事実ということで問題がありましたら、どうぞよろしくお願ひしたいと思ひます。

それでは、本題に入ります。こちらの主催者からは、三好のキャンパス移転の辺りから少し膨らませてやっていただきたいということですので、できるだけ前のほうはさらりと流していきたいと思ひます。

それで、どうやってお話をさせていたらいいかということを考えまして、レジュメにありますように、前史、それから愛知大学ができてからの揺籃期、それから大学の姿が整ってゆく成長期、更に一步踏み出すところ、そして時間がたつうちにいわゆる転換期というものがやってきます。これは大学が転換期を決めたわけではなくて、



社会全体、日本の大学全体、大きく言えば世界の大学全体、大きな世の中の流れの中で愛知大学もその影響を受けていくという側面もありました。そういうところで3つに区分して、成長期の後は発展期ということになりますので、いわゆる転換期までということと少しお話をさせていただきたいと思ひます。

私が愛知大学に就職をしましたのは30年代の後半です。初出勤の日に、これはしっかり覚えています、今で言えば部長クラスの方が、私に「非常にいい方が来てくれた、私は喜んでいる。愛大では羽を伸ばしていただいて結構だからしっかりやっていただきたい」と励ましの言葉と、お昼ご飯をごちそうになりました。これが当時の名古屋校舎(現在の車道校舎)での初出勤でした。

### (前史)

1890(明治23)年	荒尾精 東亜同文書院の前身「日清貿易研究所」を上海に開設
1901(明治33)年	近衛篤磨 上海に「東亜同文書院」(昭和14年大学へ昇格)を設置 根津一が初代院長となり、書院の経営は(財)東亜同文会が担い、貿易実務者を養成するビジネススクールとして歩み始める。

それでは、本題に入ります。お手元に簡単なレジュメを配っていますので、それに沿ってやらせていただきたいと思います。このパワーポイントは、後で写真のときに若干説明させていただきます。

まず、このレジュメを追っていきたいと思います。お手元の資料で、前史というものがあります。これは東亜同文書院時代のことです。この前史という使い方、これまで使われているのは、前身という言葉とか、最近では愛知大学のルーツとか、東亜同文書院のことをいろいろな言葉で表現しています。私は、あえて前史という言葉を使わせていただいた次第です。

この前史という言葉は、元中日友好協会会長の孫平化先生が、愛知大学の創立 50 周年記念の日中国際シンポジウムでの講演で言われた言葉です。実はそれまで、同文書院をあまり認めたくないというか、褒めたりはしなかったのですが、そのときの講演で、これは名古屋国際センターであったわけですが、初めて孫平化先生が「愛知大学の前身である東亜同文書院大学」という言葉が使われました。おそらくこの言葉は、日本と中国、愛知大学との付き合いの中で初めて言われた言葉ということで、私は大変注目しました。それから先生方も、特に中国関係の先生がそういうことに気付かれて、ここまで言ってくれたかと、同文書院は愛知大学

の前身であるとまで言い切ってくれたということで大変喜んだわけです。

その前史、ここは簡単に触れますが、明治 23 年、1890 年、荒尾精が東亜同文書院の前身、日清貿易研究所を上海に開設します。この年がまさに愛知大学のスタートであるということです。そういうことがこれからずっと受け継がれていくと思いますが、もう少し言うと、この荒尾精という方がおられなかったら、今日の愛知大学はないのではないかと思うほどです。

簡単に言いますと、この荒尾精という方は、名古屋のご出身で、幼いときに東京へ出てこられて、明治何年でしたか、陸軍士官学校に入られ、帝国陸軍の軍人として熊本鎮台に駐屯していたという方です。後に東京の師団司令部からの命令で、中国、当時の清国の調査を担当します。おそらく軍事的な機密もあつただろうと思いますが、そちらへ派遣されたということです。その中で、大変な中国通というか、清国を知るようになります。そのことが、東亜同文書院ができてから、荒尾精の思想というものが受け継がれていきます。

彼は軍の命令で来ているわけですが、ものすごい調査をし、そして得た結論は、簡単に言ってしまうと、日本は清国を占領してはならない、侵略してはならない、それから清国と提携して貿易を発展させる、そして大きなアジアをつくる、それが西欧諸国に対抗していける唯一の手段であるということです。当時、政府自身が脱亜欧入、明治維新でアジアを脱して欧州の欧に入る、脱亜欧入思想というものがまかり通ってきたわけですが、そういう中で、日清戦争を直前にして猛然と荒尾精という方が、いわゆるア



日中国際シンポジウム 孫平化氏講演

ジア主義をいろいろな方に説得し始めたということです。

これが、その下にある近衛篤磨先生、ご承知のように、近衛家というのは平安の時代から元は藤原家で、そこからずっと続いている名門中の名門の近衛家です。私たち年配方に新しい思いがあるのは、終戦後、近衛篤磨さんの長男近衛文磨さんが、GHQに戦争犯罪人として出頭を命ぜられて、出頭の前夜に自死するという悲劇が起っています。その方の子どもがこの愛知大学の理事を2012年までやっていただいているということで、近衛家とのいきさつも愛知大学は大変いろいろ関係があります。

この近衛篤磨先生というのは、ヨーロッパに2回も出張して、大変なことを学んできます。アジアはしっかり頑張らないと駄目だ、欧州、欧米にやがて清国が滅ぼされ、そして日本に押し寄せてくるということをひしひしと感じて、そして上海に東亜同文書院をつくったわけです。

その東亜同文書院の前身である日清貿易研究所というのは、学生を募集して日本から連れて行って、清語とか商業学とか色々なことを学ばせていたわけですが、そういう関係で、この荒尾精さんと近衛篤磨さん、その下にある根津一さん、この中で話し合いをされまして、そして1901年、これは明治34年です。このときに東亜同文書院をつくったわけです。これは1939年、昭和14年に東亜同文書院大学ということで大学に昇格し、終戦まで続きます。この東亜同文書院大学は全国各府県に給費生を募集して、約5,000名の学生が集まったということです。それらの膨大な記録等が、本学の図書館、東亜同文書院大学記念センターにたく

さん残されていますので、ご覧をいただいたらどうかと思います。これがいわゆる前史で、1945年、昭和20年まで続きます。

実は、1つだけ申し上げたいのは、東亜同文書院をつくったのがそこに1901年とありますが、その前に1年間だけ近衛さんが南京に南京同文書院をつくっているわけです。これはなぜ1年であったかということ、当時いわゆる義和団の乱、これは学校の社会科で習ってご存じだと思いますが、中国の豪族とか武力を持った人たちの集団が清国に対して戦闘を挑んだという事件です。それが南京を中心に非常に大きくなってきたということで、義和団の乱が1900年ですから、1年たって1901年、明治34年に同文書院を上海に持ってきたということです。以上が前史です。

それでは、愛知大学の歩みのほうに行きます。現在の豊橋キャンパスの地は1946年、昭和21年の創立前までは陸軍の第十五師団司令部、終戦直前は陸軍予備士官学校でした。これはさらっと申し上げますが、この隣の木造の建物は1908年、明治41年にでき、いきなり十五師団が入ったということです。規模はどれぐらいかということ、この敷地を見られたら分かりますが、大学の敷地だけで約5万坪、それから後ろのほうにも事務所がありました。これだけでも大変な広さです。これは軍事機密に関することです。ですから、あまり言われていませんが、1個師団というのは当時6,000人から2万人の兵員を抱えていたそうです。

ここに愛知大学を設立するということについては、上海にあった東亜同文書院大学が中国に接収されまして、約200名の学生と教職員、家族が博多に約1年かけて引き

揚げて来たわけですね。同文書院最後の学長本間喜一先生は、大変すごい方で、当時ほぼそれぐらいかかるだろうという見通しを立て、米、みそ、しょうゆ、そういうものを大学のものを売り払って大学に保管していました。あの混乱の中を1年間生き延びて、そして九州の博多へ帰ってきたわけですね。このときに、今でもあります、東亜同文書院の学生の学籍簿と成績原簿、この2つを、大変な量ですが持ち帰ったということです。そして、以後それらが外務省にずっと長い間、預けられていました。同文書院の成績証明書などの書類は愛知大学で発行するよということ以外務省から委託を受け、その業務をやっていた時代がありました。



それから、愛知県豊橋の地を選んだ理由については、1つは食料問題です。豊橋はサツマイモがよくできるということで学生は「**揺籃期**」

飢えることはないだろうということと、もう1点は当時の横田豊橋市長が大変肝っ玉の太い人で、私が聞くところによると、終戦直後のお金で50万円を市から出してくれたという話を聞いています。

それから、同文書院の他にも、日本の外地にあった大学の京城帝国大学、台北帝国大学等から引き揚げてきた先生方が熱意を持って豊橋につくろうということであったようです。他のところも随分当たられたようですが、こういう士官学校司令部跡というようなところはほとんど押さえられていたようです。

実は、設立当初から、豊橋出身の神谷龍男先生という方がおられまして、この方に一度お話を伺ったのですが、愛知大学は「知を愛する大学」ということでずっとやっていますが、設立のときに「知を愛する大学」だからこの地を選んだのか、ということをお聞きしたところ、ケタケタ笑って、「そうじゃないよ。愛知は食料事情が良かったし、ここへ来たんだよ」と。「知を愛する」というのは、大学が成長していく中で学生たちや教職員の中から同文書院の精神をよみがえらせ、つまりその根本はフィロソフィー、哲

1946(昭和21)年11月	11月15日、愛知大学を豊橋市の旧陸軍予備士官学校跡に旧制大学（旧大学令）として創立、中心スタッフは元東亜同文書院大学、元京城帝国大学、元台北帝国大学の教授が中心であった
1947(昭和22)年1月	予科開設
4月	法経学部（法政科、経済科）開設
1949(昭和24)年4月	学制改革により新制大学設置 法経学部（法学科、経済学科）、文学部（社会学科）設置
1950(昭和25)年4月	名古屋分校開設（東邦高校6教室を借用して開講） 短期大学部（法経科第2部・名古屋）設置
1951(昭和26)年3月	私立学校法の施行にともない財団法人を学校法人に組織変更
5月	元中京女子短期大学の校地および校舎を購入し名古屋分校を、現在の車道キャンパス地に移転し名古屋校舎とした

学である」と説明していただきました。これは直接私が聞いています。

次は大学の歩みの揺籃期のところです。1947年昭和22年1月予科開設、前年に、旧大学令という大正7年にできた法律、今で言う設置基準等々の法律ですが、その旧大学令が1946年、昭和21年11月に設置されて、実際に授業が始まったのは翌年1947年、に予科を開設したわけです。

予科とは何かということですが、古い方によくご存じだと思いますが、大学に入学するための1つの予備講習といえるものです。それが昭和20年代になると戦後の学制改革とともにどんどん発展して行って、やがて大学の2年間教育の教養部というものになります。アメリカでは、いまだにリベラルアーツということで、短大もしくは4年制の大学の場合2年間は教養部的な勉強をします。専門は後の2年の専門課程と大学院のマスターコースの合計4年というところが多いようです。そういう意味で、予科というのは必ずどこの大学にもあったということです。高等学校も、戦前はそういう位置付けでありました。

それで1947年、昭和22年4月に、初めて今日の一番根幹となる法経学部の法政科、経済科が開設されました。私は、この法政科について、これはうがった見方ですが、法は本間喜一先生、政は小岩井浄先生ではないか。「コイワイジョウ」と言いますが、本当の読み方は「コイワイキヨシ」と読みます。この2人の先生が創立したというか、それぐらいのすごい方なので、「法学科」ではなくて「法政科」としたのではないかなと、私は空想しているわけです。これが愛知大学の事実上の戦後のスタートです。

しかし、その中心的な軸となる思想的な背景というのは、1890年、明治23年の日清貿易研究所のフロンティア精神にやはりさかのぼるということです。そういう流れがずっと来ているということです。

それで1949年、昭和24年に学制改革がありまして新制大学となります。この予科が開設されたときは、終戦後、初めて旧制の大学令でできた最後の大学であったわけです。昭和24年になりますと学制改革があって、新制大学の設置基準ができてきます。このときに初めて法経学部の法学科、経済学科コースが設立されました。文学部は社会学科です。

それから、これは発展期に向かうときですが、1950年、昭和25年4月名古屋分校開設、大学で分校などがあるのかということですが、実は法令上は何もなかったわけです。それが後ほど問題になってきます。三好移転の原因にもなっているということです。

名古屋分校は、野球で有名な東邦高校がありますが、そこの教室を6教室借りて夜間の短大として開校したわけです。これが名古屋に拠点を置く第一歩になりました。これを指揮したのは、やはり本間先生と小岩井先生です。そのときに当時の大学の学生新聞、学生が発行した新聞に本間先生へのインタビュー記事が掲載されています。



「どうして名古屋分校をつくるのですか」という質問に対して本間先生は、「名古屋に拠点を置いていきたい。もう1つは、名古屋の実業界に送り込めるような学生を育てたい」と。これはやはり、荒尾精の日清貿易研究所から言われているビジネススクールの考え方があったと私は思っています。

それから1951年、昭和26年になりますと、私立学校法の施行に伴い、財団法人を学校法人に組織変更します。その後、財団法人は公益だとかいろいろ変わってきますが、要するに一般的な財団法人だったものが、学校法人や宗教法人などもそうですが、いろいろと法的な変更がありました。

名古屋分校は夜間部なのですが、ものすごく学生が集まって、そういうことを背景として、昭和26年に借りている東邦高校のすぐ近く、歩いて5分ぐらいの車道という地名のところにある中京女子短期大学の校地と校舎を購入したわけです。この土地は、



戦前は内木（うちき）学園と言っていました。その内木学園の2階建ての木造モルタルの校舎があったわけですが、そこを購入して、名古屋分校というものを現在の車道キャンパス地に移転し、「名古屋校舎」と名称を変えて、そして名古屋に拠点をスタートさせたわけです。

名古屋校舎に応募者が多く学生が集まるのは当然なわけです。豊橋と名古屋を比べると人口が全然違います。人口の多いところはそれだけ人が集まりますし、人が多ければ多いほど多様な人間も集まります。絶対的とは言えませんが、相対的には言えます。そういう状況の中で揺籃期が過ぎていきました。

成長期に入りますと、今度は名古屋キャンパスに夜間部ではなくて2年間の教養課程を置きます。その2年間の後、専門課程を設置します。それから、名古屋キャンパスに法経学部第二部夜間法学科、経済学科等を設置し、廃止するものは廃止するというで拠点をつくります。名古屋校舎はますます学生が集まり、社会的な評価も高まることになります。

1957年、昭和32年になりますと、そういうことを背景として、本間先生、小岩井先生は名古屋市緑区大高町の土地を名古屋校舎の校地として買収を開始しました。約2

「成長期」

1955(昭和30)年 4月	名古屋キャンパスに法経学部教養課程を開講
1956(昭和31)年 4月	名古屋キャンパスに法経学部第2部(夜間)法学科、経済学科設置 短期大学部法経科第2部廃止
1957(昭和32)年 ~	名古屋市緑区大高町の土地を名古屋校舎の校地として買収開始、 約21,000坪買収時点で名古屋市の環状2号線道路計画で不可となる
1959(昭和34)年 4月	豊橋キャンパスに短期大学部(女子)文科設置・翌年生活科設置
1961(昭和36)年10月	名古屋キャンパスに法経学部専門課程を開講
1963(昭和38)年 1月	薬師岳遭難事故

万 1,000 坪を買収した時点で、名古屋市の環状 2 号線道路計画で不可となります。以後、その 2 万 1,000 坪、森や草っ原といったところですが、それが事実上の塩漬けになってしまいます。キャンパス移転というのは、その時点で、本間先生、小岩井先生がしっかりと考えておられたわけでありまして。約 15 年間、環状 2 号線ができるから開発はできないということで名古屋市から刻印を押されまして、そのまま放っておかれたということです。ここで、まず郊外地移転というか、今は名古屋市緑区になっていますが、そういう 1 つの大きな試みがあったということです。

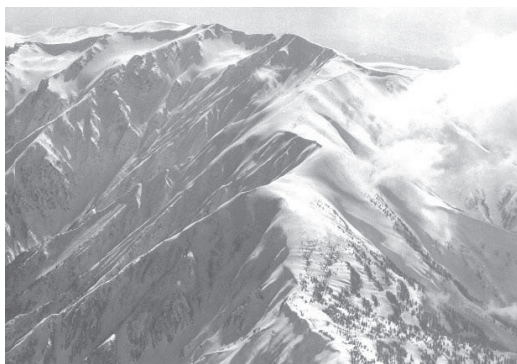
その塩漬けにされたということは、後に出てきますが、1 つは財政力の問題です。とにかく大きな計画はできないということです。そのころの財政力はどうかであったかといいますと、私なども愛知大学に就職して経験しましたが、まず人件費で教職員の給料が安い、この安さはただごとではありません。愛知大学は、とにかく安くても、貧乏でも、みんなで話し合ってしっかり勉強しようという空気があったわけです。ところが、戦後の日本の資本主義がどんどん発達しますと、資本が巨大化あるいは国際化していく中では、財政力というもの大きな存在となってきます。

愛知大学教職員の給料がどうかであったかという、事務職員で言いますと、高校卒の 18 歳の職員、給与体系というのはどこの大学でもそこから始まっていきますが、他大学の高卒の 18 歳の初任給よりも愛知大学の高卒の初任給が安かったということです。それだけならまだ辛抱できたのですが、給料が払えないから 1 カ月を 2 回に分けて払

う、月の半ばに 1 回払うのが 5,000 円、あとは残りのお金をいただくということで、それがしばらく続きます。後ほど財政再建にかかりましてその件は解消しますが、誠にすさまじい給与水準でした。

その後しばらくたってから、私とはにかくまだ入ったばかりで 20 代ですから、重要な書類は一切見る機会はありません。しかも、本部が豊橋にあったものですから、めったに行けません。たまたま一度、大高の土地処理に取り組んでいる時、いわゆる財産目録や財務諸表を目にしたのですが、誠に驚くべきことに、土地の登記簿謄本を見ると全部東海銀行の抵当に入っているわけです。それでも払えなくて、本間先生のお嬢さんに直接聞いたことですが、本間先生は「東京へ帰ってきては家のいろいろな品物を持ち出して売りさばいて東京で金をつくって、それを教職員の給料で渡すんだ」と言って名古屋へ帰って行くと、そういう生活がしょっちゅうありましたと、殿岡晟子さんというお嬢さんから話を聞きました。

続いていきますが、1961 年、昭和 36 年に先ほどの教養課程に続いて専門課程を開講します。そして、1963 年、昭和 38 年に薬師岳の遭難がありました。これはご承知だと思いますが、いわゆるあの有名な薬師岳、あそこに山岳部が登山するということ



で、12月25日でしたか、出発しまして、翌年の1月2日から4、5日にかけて遭難して13名の学生が亡くなるという大事件がありました。

このときに、覚えていらっしゃる方もあるかもしれませんが、取材合戦で各新聞社がヘリコプターを飛ばしまして、救援隊のヘリだけで60機飛んでいます。それから、救助隊員が約3,000名現地に行っています。それでも発見できなかったわけですが、そのヘリが、3月でしたか、山頂に近い太郎小屋という小屋に強行着陸して、そこでひょっとしたら休んでいるのではないかという期待を持って戸を開けたところ誰もいなかったと。その戸を開けたのが後に有名になる本多勝一という朝日新聞の新聞記者です。彼はその原稿を何と言って本社に送ったか。本多勝一は、「来た、見た、いなかった、太郎小屋に人影なし」、これを原稿として送ったわけです。これは本多勝一の若かりし頃の有名な言葉として伝えられています。そんなことで、全員死亡という事件が起きました。



太郎小屋

これは、大学に限って言いますと、教職員は100パーセント正月明けから非常に重苦しい空気で、そして悲しみに明け暮れたというか、そういう事件によって一体感が大

学に生まれたということは事実です。

もう1つは、全国からもすごい額の救援金が送られてきたことです。後に、この事件が片付いて5年後ぐらいになりますが、『薬師』という本を出版しました。この事故の全容は誰も見ていなかったわけですから解明はできませんが、それを明らかにして、そして寄附をいただいた方々に、この厚い本ですが、それを大学から贈りました。これが後ほど有名な山岳事故の模範的な本になるということで、古本屋でみんなあさって、買おうとしてもなくなっている、ものすごい値段で古本屋では売れていると、そういう事態を招きました。

私どもは、この事件で、確かに愛知大学という大学があったということ、その歴史、同文書院までの歴史のこともその記事の中で知ってくれた人がたくさんいたと思います。そういう意味で大学が全国に知れ渡ったという事件でありましたが、ただ、そのときの重苦しさというのは本当にすごいものでした。その事件の責任を取って、1月26日に本間喜一学長は辞表を提出しました。

そのときに、「人の命は地球より重い」という言葉を残して大学を去ったということですが、誠に辞め方もそうでしたが、その1963年、昭和38年までのいわば戦後18年間、そして本間喜一先生は上海の東亜同文書院大学の終戦時の学長であったわけで、まさに20年以上にわたる期間学生の面影を見て、なおかつ教育者であられたのです。それは天候によって起こった事故であるけれども私は責任を取らなければいけないということで大学を去られたのであります。

次に、転換期のほうへ行きます。1963年に薬師の事故があって、それから少したっ



て1968年、この間全国的な学園紛争がありました。本学も学園封鎖されたりしましたが、誠に大変な事件です。私はあのとき車道キャンパスにいまして、一度騒ぎがあると

1週間ぐらい家に帰れませんでした。4階建ての屋上から、覆面でヘルメット姿の学生たちが火炎瓶を投げるわけです。下にいるのは別の派の学生で、それに対して投げる

「転換期」

1968(昭和43)年～	全国的学園紛争
1968(昭和43)年 2月	中日大辞典 初版発行 (現在第3版)
1972(昭和47)年 8月	愛知県知事、名古屋市長に対し、大高土地の代替地の斡旋を含め、いくつかの提案をおこなったが、いずれも不可能となり、最終的に断念せざるを得なかった
1977(昭和52)年 1月	西加茂郡三好町土地視察
5月	三好町長、「町制20周年記念事業の一環として愛知大学を誘致する」旨を表明
12月	大学評議会は、「大高用地の代替地、文部省から指摘されているいわゆる名古屋校舎問題の解決をめざす、法経学部分離問題等の将来計画を勘案する」との意見集約をおこない、三好校地の買収交渉に入ることを決定
1978(昭和53)年 4月	三好町当局と土地買収交渉を正式に開始 12月買収面積、借地面積、単価、農地補償などで合意
1979(昭和54)年 1月	愛知県知事あて「土地開発行為協議申出書」を提出 *3月認可
7月	名古屋鉄道豊田新線開通
10月	愛知県知事あて「土地開発本申請」を提出 申請した9項目とは、 ①開発行為許可申請書、②保安林指定解除申請書、③林地開発許可申請書、 ④砂防指定地内行為許可申請書、⑤農地法第5条による許可申請書、 ⑥埋蔵文化財発掘許可申請書、⑦国有財産用途廃止についての申請書、 ⑧公団施設付替工事申請書、⑨大規模行為届出書 *1980(昭和55)年9月認可
1981(昭和56)年 5月	三好校地運動場施設造成に着手
1988(昭和63)年 4月	名古屋新キャンパス (現みよし市) 開校
1989(平成元年)年 4月	法経学部を改組し、 法学部1部、経営学部 (名古屋)、経済学部1部・2部 (豊橋)、 法学部2部 (車道) 設置 大学院法学研究科、経営学研究科を新名古屋キャンパスへ移転
1991(平成3)年 4月	大学院中国研究科、文学研究科修士課程設置
5月	愛知大学創立50周年記念事業構想委員会発足
1992(平成4)年10月	50周年記念事業委員会、募金委員会、50年史編纂委員会発足
1993(平成5)年 5月	東亜同文書院大学記念センターを設立
1996(平成8)年11月	創立50周年記念記念式典・祝賀会、創立50周年記念感謝の会開催
12月	車道校地拡幅のため用地買収を理事会・評議会にて決定
1997(平成9)年 4月	現代中国学部設置
1998(平成10)年 4月	教養部廃止 国際コミュニケーション学部設置
2000(平成12)年 5月	エクステンションセンター開設

ということですが、どうやってやるかとい  
いますと、一升瓶に、石油もだいぶ入っている  
ようでしたが、それにガーゼを垂らして、  
パッとライターで付けて、付けた途端にバー  
ンと下に放るわけです。下へ落ちて爆発  
するときの炎の高さというのは 10 メートル  
以上ありました。ものすごい爆弾が落ち  
たみたいなのです。それが 1 日に何十発  
と落ちるわけです。それから、もうちょっと  
慣れてくると、先に火を付けないでガソリン  
だけバンバン、バンバン屋上から落とす、  
最後に一本だけ火の付いたものをやると火  
の海になると。そういう闘争で、暴力は日常  
飯です。そういうのが全国的な規模でなされ  
ていました。そして愛大でも、豊橋キャン  
パスでは火炎瓶は飛ばなかったようですが、  
相当な暴力事件がありました。そんな事件  
があったということです。

それから、もう 1 つ、さっきあえて言わ  
なかったのですが、これは深入りしませんが、  
愛大事件というものがありません。これは  
愛大の寮生を中心としたもので、このキャン  
パスで警察官が 2 名寮生に夜捕まって、  
逆に警官隊が大動員されて学生を逮捕する  
ということで、11~12 名だったと思いま  
すが、最高裁まで裁判が続く事件がありま  
した。そのときにも非常にすごいなと思っ  
たのは、2 代と 4 代学長本間喜一先生、3 代学  
長の小岩井先生、それから 5 代学長の脇坂  
雄治先生、3 名の学長を経験された先生方  
が、地裁、高裁、最高裁と弁護士として学生  
を弁護するわけです。これは思想調査に  
来た国家が悪いんだと、そういう理由で最後  
まで学生を擁護して救おうとしました。す  
ごいことだなと思いました。そういう事件  
が昭和 20 年代にありました。

学園闘争のあった時代に戻しますと、そ  
の中で一筋の明かりと言えることに、1968  
年、昭和 43 年に『中日大辞典』の初版が発  
行されたことです。戦前の東亜同文書院の  
時代から何十年もかかって編さんして、そ  
して中国で没収され、それらが郭沫若さん  
によってこちらへカードが返され、愛大で  
の編さん作業の末、ようやく『中日大辞典』  
の初版が発行できました。現在は 3 版まで  
発行されています。そのころの鈴木擇郎先  
生、それから今泉潤太郎先生、その辞書をつ  
くることに傾ける情熱、夜中でも昼間でも  
いつ行っても机で一字一字やっておられま  
した。すごいなと思いました。それがいよいよ  
出版されて、あのときに 2,000 部でした  
か、1,000 部でしたか、まず中国へ、日中友  
好のためにということでお贈りしたとい  
うことがありました。そういうものが、ポンと  
付いたろうそくの火のように気持ちとして  
は明るいものでした。

ただ、この間私ども 10 年ほどの学園紛争  
やいろいろな事件の中で、全くこれは個人  
的な感じですが、先生方は、そういう学園紛  
争や、団体交渉に出るとかいろいろなこと  
に対応しなければいけない、そういうこと  
で研究の時間がかなり失われていたような  
気がします。この期間の出版情報を見ても、  
愛知大学の先生載ってないなと考えたこと  
が何回もありましたし、実際に少なかった  
ような気がします。これは素人の個人的な  
印象です。

さて、1972 年、昭和 47 年 8 月、愛知県  
知事、名古屋市長に対して、大高土地の代替  
地のあっせんを含め幾つかの提案を行った  
もののいずれも不可となり、最終的には大  
高の 2 万 1,000 坪をあきらめざるを得ない

ということになります。

幾つかの提案というのは、第1案は大高の土地は道路用地として提供するかわりに同じ面積の代替地を愛大によこせ、第2案は愛大の敷地をさけて環状2号線をつくれ、第3案は愛大の敷地を通ってもいいが愛大の敷地の真下をトンネルで通過せよという提案です。これについても市や県と相当協議をしましたが、とにかくこれは都市計画の決定に従わざるをえなかった次第です。

トンネル案が何故で出てきたかという、当時、関西大学が大阪の繁華街の近くにあり、あそこもパンクしそうになったことから今の千里山、千里校舎へ移りました。あそこは地下を名神高速道路が通っているわけです。政治力が相当使われたと思いますが、地下が可能であるかどうか、何回も見学に行きました。われわれは設計士とかいろいろな方々に相談のうえ可能であると判断してやったのですが、これも駄目でした。

そのころ私どもは、大高の緑地の開発を見据えながら、同時に情報集めをやりました。名古屋校舎が移転できるような余地のある土地はないだろうかということで、私の記憶では、名古屋市内および近辺の約25カ所の土地を見ました。

いずれも、これはいいと思っても鉄塔が立っていたり、交通のアクセスが不便であったり、いい土地には何かいろいろあるわけです。そこで、相当な情報網を張っていたわけです。愛知大学が傾くかつぶれるかという大変な事業になると私は思ひまして、やはり情報収集をきちんとやらなければいけないとの考えのうえ、1つは情報が全部集まるような網を張るということ、それから情報というのはガセネタも多いわけです。

今、アメリカのトランプがフェイクニュース、偽のニュースと言っていますが、ガセとかフェイクとか、それに似た情報もたくさんありました。まるで一匹オオカミのように小さな自称不動産屋まで動き出すということですから、まず情報を得る、それからその情報を整理して正しいかどうか見極める、その上に立って政策を立案する、そして実行する。まさにこの4つが大きな仕事をするときには一番大事であるということで、武田信玄の本などを思い出し、あの信玄のろし、山と山にのろしを上げさせて攻め込むかどうかを決めるという、『甲陽軍鑑』などを見ました。すごいことが書いてありますが、そういう戦術をとって信玄は次々に国を落としていったということで、そういう4つのことが大事であろうと痛切に感じたわけです。

それで、西加茂郡三好町、これは豊田市と隣接する町です。今はみよし市になっています。当時ちょうど町制20周年を迎えたところで、話を非公式に持っていったわけです。そういう土地の話は、利害関係が絡んできますから、表に出たらあつという間につぶされます。例えば愛大でこういう土地がありますどうでしょうか、などと当時、大学の評議会を出したら、明るく日にはみんな世間の人は知っているというぐらい、一言漏らすと大変ですので、当時の学長、理事長の特命事項として私どもが動いたわけです。少数で動くということになりますが、そういう動き方をして、この三好町というのがぐっと浮かんできました。三好町が、愛知大学を誘致する。しかも町制の20周年記念事業で、便宜はできるだけ図る、ということでした。

この誘致するというのが非常に大きいのです。まず、開発がしやすいわけです。開発で一番難点は都市計画法というややこしい法律です。第1の審議は町がやって、それからその上の県がやって、それから分かれて例えば森林法とか林地開発は当時の農林省へ行くとか、そういうことで何年もかかっていくわけです。そうやって町が受けてくれたということは、上部機関の県や国が動くということで、大変話が早い、うまくいきやすいということです。

そして、大学の評議会で1977年、昭和52年から53年、54年くらいまでいろいろと検討していきました。大学内部の意見は真っ二つに分かれました。教授会でも大学の評議会でも、とにかくすごい議論が毎日続きました。

非常に単純な意見や、有効な意見などいろいろありました。例えば三好移転に反対する、死んでも反対するという先生とある晩話をして、先生は三好移転がなぜ嫌なのか、理由がはっきりしないから言ってくれと言ったら、「三好に行く俺の家から通勤が遠くなるしなあ」と、「えっ、そんな単純な意見ですか」と言ったら、「俺は思ったことを言っただけだ。他の人にも聞いてみろ」と言われまして、「移転すると大学が自分の家から遠くなるから嫌だという人がいますが、先生はいかがですか」と言ったら、「俺はそんな不真面目な男じゃない」と怒鳴られたこともありました。いろいろな意見がありました。

ただ、文部省から大変きついお達しがありました。工場等制限法、工場というのは町工場の工場ですが、その法律が昭和30年代から整備されてきてまして、工場と大学は、大

都市、特に政令都市には認可しないということです。いわゆる大学の創設とか定員増、学部の増というのは許可しないという方針が出ました。とにかく名古屋市内には移転できません。

一方、名古屋校舎は、変則的教育形態であったということです。何が変則的教育形態なのかといいますと、法経学部が豊橋にあって、法学科、経済学科、経営学科、それから文学部もありましたが、この法経学部が大問題でした。同一学部が豊橋にもあり、名古屋にもあり、同じものが2つある。では、ついでにもう1つ岐阜にもつくろうか、つくれるんじゃないかと。そんなことでポコポコ、ポコポコ、インチキ大学ができたらどうなるんだと、まさに変則的な大学形態であると。それを昭和20年代から今まで認めてきたのは文部省でしょうと。いや、それは認める、認めないというよりも歴史の流れでそういうことになってきている。それを問題にするなら、今まで名古屋車道校舎を出た学生は卒業証書も取り消す、そういう権力の行使はできるんだと。官僚はすごいですね。行くところまでいくと、俺たちは阻止するよと、ものすごい公権力というか、そういうことが出てきます。

とにかく法経学部をきちんと分離して、法学部だったら三好だけ、経済学部は豊橋だけ、経営学部は三好だけというふうにきちんと学部ごとに分離をして、そういう教育形態をとらないと駄目だということです。ただ、名古屋車道というのは2,300坪しかないまち中の校舎ですから、とにかく新キャンパスは急を要したということです。

そういうことで、大学の評議会としましては、1977年、昭和52年、大高用地の代

替地、文部省から指摘されているいわゆる名古屋校舎の問題の解決を目指す、それから法経学部の分離問題等の将来計画を勘案するという意見集約を行い、三好校地の買収交渉を決定しました。

実はこのときにも、年老いた本間先生が来られました。この日の評議会がどうなるかということで、本間先生が来て最後に意見を述べるということを皆さんに了承を得て来ていただきました。夜も遅い時間、本当に真っ白な頭をして、しかしきちっとした発言をしておられました。本当に発言されたのは、評議会が終わる最後のときでした。

私は、その昭和 52 年の評議会で三好の土地を買うかどうかということにノーという答えが出たら、個人的にはこの大学にいてもしょうがないなど、こういうときに間違った判断をする大学はいてもしょうがないなど、実際にそういう気持ちになって、この評議会に賭けたわけです。

その結果、投票をやったら全く同数で結論が出ません。そのときに、最後に本間先生のご意見はということで学長が聞かれました。本間先生は何と言ったか。簡単な言葉です。「土地は買っておきなさい、こんなにいいチャンスはないよ。学部の分離とか増設とかそういうことは後で考えればいいじゃないか。土地はそうそう買えるものではない。大高でも失敗している」と。「とにかくいい条件だから土地は買っておきなさい」ということを 3 回繰り返し話されました。そして、「私はこういう会議に出るのはこれきりにします。皆さんでご判断ください」と。そうしたら議長が、本間先生もそういうふうにおっしゃるから、ひとつここで本間先生のご意見を勘案しまして、取りあえず

用地買収はしましょうか、ということで皆さん黙って暗黙のうちに賛成したと、そういうことでした。

そのときに、「身を賭してこそ浮かぶ瀬もあり」ということわざみたいなものがありますが、本当に困り果てて、何もかもやっただけでもどうしてもうまくいかないというときに救いの神があらわれる、そういうことを私はつくづく感じました。

そういうことで、一挙に用地買収が翌日から動き出すことができました。それはとにかくピッチを上げないと文部省の指導に間に合わないということで、1978 年、昭和 53 年に土地の買収交渉を正式に開始しました。そのときに私が一番先にやったことは、三好の新校舎ができれば電話番号を 1 番を取る、つまり 4 桁、何番の 1111 を取るということです。これを取るのに 6~7 年かかりましたが、そういうできることからボンボン自分の判断でやっていったわけです。電話番号で 1111 を取るなどということは、当時の電電公社が全部いいのを取ってしまいますのであり得ないことですが、そういうこともエピソードとしてありました。それで開発申請を出しまして、9 項目の開発申請を出す書類だけでも、積み上げると床から天井まで届くような大変な量でした。

私は、キャンパスは複数あったほうがいいと思います。つまりそれは商売で言う融通手形を回せるということです。何といっても財政が問題になってきますから、豊橋が落ち込んで財政的にピンチのときは名古屋から資金を回す、その逆の場合は名古屋へ回す、そういう 1 つの融通手形というのがキャンパス同士でできるわけです。それから、教育的な問題は、複雑な問題もあり

ますので今は申し上げます。

創立 50 周年記念事業のことを少し言わせていただきます。三好に移転してから創立 50 周年記念行事をやったわけですが、創立 50 周年を迎えるときに、学内で、記念事業としてどういう立派な式典をやるかということでいろいろ議論が始まりました。私は、式典なんかやらなくてもいい。それよりも大きな目玉になる行事、社会的に呼び掛けることのできる行事をやろうと。それは金がかかってもいい、寄付金はみんなで頑張って集めようということで大見えを切りまして、その結果寄付が約 5 億円集まりました。創立 70 周年事業のときは 6 億円でしたか。

例えばコンサートでも、名古屋フィルハーモニー交響楽団を呼んで無料でやろうという案が出て、そんな名古屋フィルを呼んでもしょうがないだろうと。では、NHK交響楽団を呼ぶかということで、N響なんてあんな高いものを呼んでもしょうがない、私はベルリンだと言って、エージェントともいろいろ情報を取っていたものですから、結局ベルリン交響楽団を呼ぶことになりました。単独で呼んだら 8,000 万円ぐらいかかりますので、幾つかの会場と組んで、その 1 つを愛知大学の 50 周年記念コンサートで借り切るということで、ミハエル・シェンヴ



ベルリン交響楽団演奏会

アントという有名な指揮者が来られました。いろいろ打ち合わせをしまして、愛知県芸術劇場コンサートホール 2,000 名の会場を超満員にしたということがありました。

それから、『ワイルド・スワン』で有名なユン・チアンという方もイギリスから呼び寄せまして、これも鶴舞公会堂 2,000 名超満員にしました。学外からは「愛大もこ



ワイルド・スワン読書感想文表彰式 右端著者ユン・チアン氏

んなことができるようになったのか」との声をいただくことができました。

そういうことで、こまいことをやるのではなくて、でかいことを 1 つか、2 つか、3 つかに絞ってやること、それから記念建設事業は、例えば山の家・愛知大学セミナーハウス、今、誰でも泊まれるようになっていますが、そういうことも 1 つですし、あまりちまちま金を出さずに、1 つでかいことをやろうということで呼び掛けまして、一応記念事業はそれなりにできました。

ちなみに、当時の寄付金を 70 周年と比べてみますと、単純比較はできないですが、50 周年のときだけ見ますと、教職員とか父母、同窓生といろいろ分けましたが、わりと頑張ったのは教職員です。教職員が目標の 74% を達成しました。1 人当たりになりますと、30 万円教職員が寄付をしています。教職員というのは教員と職員ですが、これは

非常に頑張ったと思います。

パワーポイントの写真について、ご説明いたします。これは師団司令部ができたときの建物、この正門がいまだに当時のままで残っているところです。



これは、創立当初のメンバーです。私もよく知りませんが、本間先生、小岩井先生等がいらっしやいます。小岩井先生は背の高い



方だったから、若き日の小岩井先生よくわかります。この方は自由主義者で、リベラリストで投獄されたりしていましたが、すごい方よくわかります。愛大をつくった方です。これが、本間先生ではないかと言われていいます。他にいっぱいいらっしやいますが、ほとんど亡くなられているということです。



名古屋車道校舎で、火炎瓶が屋上から何百本と飛び交ったところです。



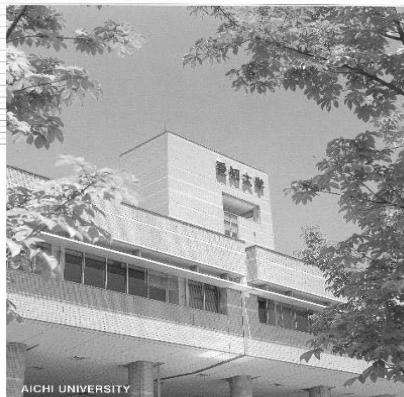
今はなくなっていますが、三好キャンパスです。上空から見た三好キャンパスですが、用地が全部で6万5,000坪あります。そのうち緑地として残したのが38%、あとは開発したということです。



これは話せば長くなるから話しませんが、回復緑地といって、自然緑地を38%残しても、その分だけどこかへ木を植えろと。一番安いのはツツジだったものですから、ツツジをダーッと植えかけたら、ツツジは木ではない。これぐらいの安いもので何かないかと言ったら、秋に咲く萩の花、あれは都市計画法では樹木なのでそれを植えるとか、それからカシの木でもウラジロガシとか、いろいろ木が指定されています。地元の人が喜んで、俺も庭で商売用につくったスギの木があるからと言ってスギの木を300本ほどここにダーッと植えました。しかしスギやヒノキは回復緑地にはなりませんから

# NAGOYA CAMPUS

愛知大学  
法学部1部 / 経営学部 / 現代中国学部



全部抜いてしまいました。そして、都市計画法に沿った樹木を植えたということです。このキャンパスがちょうど20年間、三好にありました。そして新しく笹島へ移転するということで、これはまさに1つの時代の流れと同時に、新しい転換期から発展期へ移る過程だと思えます。

最後に、大学でうれしかったのは下手に思想的に右翼化したり、左翼化したりせず、そしてあるべき姿は、1つはアカデミズムです。これを捨ててはいけません。大学が時代の職業教育の場みたいになってしまっただけだと思えます。財界のある大手の社長の話を聞きましたが、このごろ大学は職業教育みたいなことばかりやって、学生が来るけれども、これでは駄目だ、日本の将来は厳しいと。大学では哲学をやってください、職業教育は企業がやりますということをはっきり言っておられました。やはりアカデミズムです。そういう素地というのは、愛知大学は学生たちが自らフィロソフィーと言って成長してきましたので、それが必要だということです。

それから、2番目はリベラリズムです。考

え方とか行動、そういったものは自由で責任を持ったことであるべきだと思います。もう1つは、多様な学生あるいは多様な教職員がいる大学、今、ダイバーシティという言葉が流行語みたいになっていますが、まさにそういう多様性というのがあって初めて高等教育というのは伸びていくのではないかと思っています。愛大はその3つを守ってきちっとやっていただけたらと、そんな感じがします。

ちなみに、私は現在81歳です。こんなところで話をするような人間ではありませんが、話をする人がだんだん少なくなっているとのことでしたので、お話をさせていただきました。ご清聴ありがとうございました。